お礼の言葉

東京海洋大学　賞 雅 寛 而（たかまさ ともじ）

平成 29 年 3 月 17 日（金）

本日はお忙しい中、私、賞雅寛而の東京海洋大学最終講義及び退職記念祝賀会にご出席いただき、大変ありがとうございました。

私は昭和 55 年（1980 年）から 40 年近くにわたり本学（東京商船大学と東京海洋大学）で教鞭をとらせていただきました。商船大学在学中には教員になるとは全く考えていませんでしたが、商船大学を卒業し船舶職員の後、大学院を修了し大学に奉職しとそれなりの紆余曲折を経て、振り返ってみればなるべくしてなった、もしくはあるべき道を歩いてきたように思います。言い換えれば職務上あるいは生活上その時々の判断・選択がある程度適切であり、幸運にも大過なく勤められた（と思いますが・・・）ということです。これは在学中そして社会に出てからも良き師・良き同僚・研究仲間そして良き学生に恵まれ、私の知識・経験そしてネットワークを深めまた広げてもらったことが一番大きかったでしょう。

ここで大学、すなわち学部もしくは大学院は、学生にとってより良い教育を受け研究を行う場ですが、最も重要なことは社会に出てからの自分の判断・選択力を養う訓練の場だということです。判断・選択力を得るためには、無駄や失敗を恐れずに幅広く挑戦しなければ得られない己の経験がまず必要であり、このような挑戦的経験は社会人になってからではなかなかできません。またこの判断・選択には自分の知識・経験だけでなく第三者的アドバイスが不可欠ですので、信頼できる師･仲間とのコミュニケーションネットワークを構築する力を育成することが必要です。私は、授業で、研究室で、またはラグビーで、上記の考えをもとにして学生の皆さんに接してまいりましたので、申し訳ありませんがあるいは少し厳しい面もあったかもしれません。

一方、私の専門である理工学研究において大学の研究者として最も重要なことは、それぞれの分野であるいはそれらをまたがって、我々人類の将来に必要なあるいは望まれる新しいアイデアを生み出し、それを具現化体系化していくことです。前者には、研究者個人の思い付きと（時には無謀な）推進力が必要であり、後者には信頼できる同僚・様々な分野の研究者仲間とのコミュニケーションネットワークに基づく協力が不可欠です。私は若年からアイデアをだすこと、もしくは思い付きはわりと得意だった（言い換えればあまり他の研究結果にとらわれない）のですが、後年それを具現化体系化でき研究成果を曲がりなりにもあげられるようになったのは、私の突飛なアイデアを尊重しご協力いただいた同僚・研究者仲間の皆様のおかげでしかありません。

最後になりますが、40 年近くにわたり共に楽しく過ごさせていただいた研究室及びラグビー部ほかの学生・卒業生諸君、研究・学会活動でお世話になった研究関連の皆様および本学で私の役職ほかの各業務を非常に強くサポートしていただいた教職員の皆様に、感謝の意を表させていただきます。

皆様、長年にわたり大変ありがとうございました。